

観光フォーラム

コピーレフト論

Debate: Copyleft vs Copyright

大橋 昭一

Shoichi Ohashi

和歌山大学観光学部

人間の知的作業で大きな問題となるものの1つに、著作権 (copyright) がある。これまでの社会では、著作権の存在が知的作業の推進に役立つところが大きいという観点になって、これを私的権利として保護するのが強い世界的通例であった。しかし近年、情報技術の進歩、特に Web 2.0 の登場を契機に、旧来のような著作権私有から著作権共有 (copyleft) へ移行すべしという主張が起こっている。

コピーレフトの思想は、すでに 1984 年フリーソフトウェア財団を創立したストールマンによって提唱されたもので、一言でいえば、「著作物の利用・コピー・再配布・翻案等を制限しないようにすること」で、そのシンボルマークは図 1 のようになっている。通常のコピーライトでは、マークの C が右向きの所、それに反対という意味で、C が逆向き、左向きになっている (以上は注1による)。

特に情報技術の進展が大きな意義をもつツーリズムの領域では、コピーライトからコピーレフトに移行することが重要と強く主張しているものに、南デンマーク大学のリドバード (Lidbørd, J.) と共同研究者ヒャラーガー (Hjalager, A.) がある (文献は下記注2)。彼女たちはツーリズムの研究・教育・実践 (ツーリズム業務) の批判的変革の一方法としてこのことを主張している (ここでいうツーリズムの批判的変革論について詳しくは下記注3文献参照)。

まず、著作権などの歴史的根源を探てみると、近代における権利法の淵源となっているのは、一般的にはローマ法であるが、ローマ法では、事物の所属権は図 2 のようになっていたといわれる。このうち例えば、「共有的所有物」(Res Universitatis) は公園等をいうものである。

リドバード／ヒャラーガーによると、このローマ法体系で、著作権は、本来、「神の支配下にあるもの」(Res Divini Juris) に

図 1：記号の違い

コピーライト	コピーレフト
©	Ⓒ

属するものであり、著作者本人 (本人の死後は相続人) の権利 (right) と考えるのではなく、この世に残したもの (left) と考えるべきものである。こうした考えは 1999 年のボアソ (Boisot, M.) などにもみられる (注 2, p.99 による)。

現代的な考え方によると、コピーレフトの基本的な考え方は、知識は絶えず進歩してゆくもの (ever changing entity) であるから、単に最初の生産者だけではなく、それを学んだ者や利用する者たちの絶え間のない反芻や応用努力によってはじめて、その時々において真の力を発揮できるものとなる、という点にある。

これに対し、これまでのコピーライトの考えは、知識は最初の提示者によって完成された形で提示されたものであるから、その後の研究の追加や補足などを必要とはしない (completed work)。それ故、知識は最初の提示者の全くの所有物であり、それ相当の報酬に値すると考えられるものとなる。

このようなコピーライトの考え方によると、知識の発見は数少ないものであって、発見者の特別な才能や努力によってのみなしえられるものである。しかも完成された姿で提示されるものであるから、後学の者たちの補足的な努力などは無用なものと考えられる。

しかしこのことは、現在の知的生産の姿とは合致していない。現在は、知的生産には多くの者が関与し、新しい追加的補足的知見が生まれることも珍しいことではない。旧来からの考え方や知識について絶え間なく進歩・改善が行われ、乗り越えられる試みがなされるようになっている。

図 2：所有権のローマ法体系

無所有者 (例えば空気) :	Res Nullis
個人所有物 :	Res Privatae
公的所有物 :	Res Publicae
地域的所有物 :	Res Communes
共有的所有物 :	Res Universitatis
国際的所有物 :	Res Imperium
神の支配下にある物 :	Res Divini Juris

出所：注 2 文献、p.98.

そういう意味では、明らかに、時代は変わったのである。とりわけ情報技術の未曾有の進展・拡大が、情報（知識も情報の1つ）の生産・流通を中心にした知的作業のあり方を根本的に変えたのである。それにもかかわらず、現在のような情報技術がほとんどなかった時代の産物であるコピーライトの考えを墨守するのは、時代錯誤も甚だしい、とリドバード／ヒヤラーガーたちは主張するのである。

ただし、コピーレフトは著作権放棄をいうものではなく、それを公共のものとして利用の促進を追求するものである。端的には、共同利用権というべきもので、例えば、GNU プロジェクトなどのルールに従うことが必要である。故にそれは、いうまでもなく、他人の成果などの無断引用をいうようなものでは毛頭ない。引用文献や典拠箇所を明示するなどの責任は、厳守することがかえってますます絶対的条件になる。

リドバード／ヒヤラーガーが提起している「コピーライトからコピーレフトへ」の主張は、直接的にはツーリズム領域を念頭においたものであるが、それは、いうまでもなく、学問の世界一般に妥当するものである。今日、人間活動はますますグローバル化し、研究・教育ではますますグローバル化の視点が不可欠となっている。こうした時にあたって、海外ではコピーレフトの考えが起きていることを充分承知しておくべきであると痛感する。

さらに、リドバード／ヒヤラーガーの所論で注目されることは、コピーレフトの主張がツーリズムのイノベーションと関連づけて主張されていることである。この点も、事の性質上、ツーリズムに限定されるものではないが、イノベーションの推進のためには、コピーレフトの考え方をとり、これまでの知識や知見をさらに発展させてゆくという見地が肝要である。

イノベーションは、とにかく、新しいことをすることであるから、何らかの形や程度でコピーレフトの精神が不可欠である。これに対していえば、コピーライトの考えは、知識や知見について固定的な考えにたつもので、知識・知見の発展・変革には適したものではない。

知識・知見へのアクセスにしても、コピーライトは特定者に限定されることを前提にしているが、それはもはや時代に合わない。現在は、それが特定者に限定されないという意味でも開放的になっている。コピーレフトの考えが必要なのである。

さらに注目されることは、コピーライトが成果に対する個人主義的な評価・称揚を象徴するものであるのに対し、コピーレフトは、集団的な共同的努力の成果をさすのに適した概念として提起されていることである。コピーレフトが、こうしたイノベーションと共同性との精神をもつものであることを代表的に示す事例として、リドバード／ヒヤラーガーは、南デンマーク大学で開発され、2009年から実施されている INNOTOUR プロジェクトを紹介している。

INNOTOUR は、innovation と tourism との合成語であるが、彼女らによると、それは真のクロス・ディスプリナリの精神に立

脚したツーリズムの研究・教育の方式で、Web 2.0、コピーレフト原則およびイノベーション推進の考えを中心原理としたものである。

それは、業績や成果に対し個人的に酬いるという、ローマ法の *Res Privatae*（個人的所有物）から、集団的共同的な活動や参画、批判的思考と貢献の精神にシフトしたもので、まさにローマ法でいう *Res Divini Juris*（神の支配下にある物）の精神に立脚したものである。

これで見ると、コピーレフトは、何よりも、ある事柄の成果や知識を、個人のものとはみないで、共同の（common）成果とみるところに真義があるものともいえる。

ちなみに、ウェールズ大学のモーガン（Morgan,N.）は、こうしたコピーレフトの考え方を知的作業における新しい注目されるべき概念と位置づけ、ツーリズムの研究・教育においても知識形成・学習・共同作業（collaboration）の新しい原則になるものと評している（注4,p.73）。リドバード／ヒヤラーガーも一員である、こうしたツーリズムの批判的変革論は、今や世界的規模で発展している（注3参照）。

注1：グーグル、ウィキペディア・フリー百科事典「copyleft」

注2：Lidburd,J.J. and Hjalager,A. (2012), From Copyright to Copyleft, in: Ateljevic,I., Morgan,N. and Pritchard,A. (eds.), *The Critical Turn in Tourism Studies*, London: Routledge, pp.96-109.

注3：大橋昭一（2012）「批判的観光学の形成—観光学の新しい一動向—」『関西大学・商学論集』57巻1号（6月）

注4：Morgan,N. (2012), Critical Tourism Education, in: Ateljevic, Morgan and Pritchard (eds.), *The Critical Turn in Tourism Studies*, pp.73-74.

受付日 2012年3月19日

受理日 2012年5月24日